

エッセイ 中島邦彦 (フラワーデザイナー)

私は男の子三人の父親である。

長男が大学進学の時「宇宙物理学を専攻したい。」と言った時、そう言えば小さい頃に月を観たい、夜空を観察したいと天体望遠鏡を買ってやった記憶で妙に納得した。

次男は動物が好きで、その方面の大学に進みたいと言った時も、小さい頃、飼っていたハムスターが死んで大粒の涙を流しながら庭の隅に、クチナシの花を添えて埋めていた姿を思い出し、素直に納得した。

七歳離れた長男と四歳離れた次男を小さい頃から尊敬している三男は、「お兄ちゃんが空(宇宙)と陸(生物)なので、僕は海洋の世界を目指したい。」と云った時も「そうか。」と、ただただ、納得したものである。

世の中の多くの父親は、子供の見本となるべく日々仕事に邁進されているのに、私は宇宙・生物・海洋と、どれも全く無縁の世界に居る。

てデザイン会社、メーカーの宣伝部で仕事をした後、三十八歳でフラワーデザイナーの世界に転身した。

この子供たちに何を伝え、何が出来るのか。いや、そんなことを真剣に考えた記憶もない。ただ、懸命に花の仕事で生計をたてること、花を通して何が出来るのか。そんなことしか考えてこなかったように思う。

感じる心、想像するちから。

思えば、長男が宇宙の観測で南米チリに行っていた頃、彼が家に残っていた宇宙の本を手に取り、パラパラと読み始めた。ページに『ビックバン、宇宙の始まり』を目にして、そうだ、宇宙のことについて長男と話をしてみたいと、宇宙関係の本を読み始めた。

当初は、何が何だか全く解からない。地球は太陽の周りを毎秒三十キロで回っている？そんなに早く？なぜ、地球は太陽の回りを周るの？太陽風、オーロラ…。名古屋から帰熊した長男に質問を試みる。「君は、ビックバンを信じているの。」宇宙の世界にいる人達は、こんな入り口で悩んでいたら先に進めないではないか。馬鹿だなあ。

私はどうしても想像できない出来事に出会うと、想像できるまで、何度も、何度もイメージを作り上げる性格である。いや、いつの間にかそんな性格になってしまった。

宇宙ができて百三十七億年。自分の過去を見たいと思えば、光の速度を超えることで、過去を見る事ができる？タイムマシンの映画の世界。いや、過去には行けても、未来には行けないはずでは。ああ、映画の世界。想像は自由か。太陽があつて、水星、金星地球…。水があり、空気があり、程よい気温。可視

光、色の世界。紫外線、赤外線。美術の世界がここにある。なるほど。イメージの世界をひとつひとつ辿れば、地球上に生物が誕生して…。あれ、生物、海洋。なあんだ、子供たちが興味を持った世界は、どれも繋がっているじゃないか。



カット・小川正嗣

生物は動く。動く原動力は食べ物。食べ物はタンパク質、アミノ酸、細胞分裂。再生医療。動物より優れているのは、動かないで生命の維持ができる植物。木や草花。二酸化炭素を吸収して、光合成する優れもの。大きな宇宙の中の太陽系、程よい距離にある地球。海があり、地球の重力のお蔭で生物、植物が守られている。

る。受精した細胞が分裂を始め、過去からの遠い記憶、DNA。あるものは豚に、あるものは人に。六十兆もの細胞が絶えず再生を繰り返す。細胞は絶えず連絡を取り合い個々の機能を維持している。凄い。夫婦でよく話すことがある。「私たち二人とも大学は文系なのに子供達は理系。どうしてだろうね。」と。三男は、大学進学の際に海洋の世界から工学部に方向を変えている。判らないと思っている世界はどこかで繋がっていることを教えてくれた子供達に感謝して、今度はもっと深く、技術工学の世界を知りたいと思う。遙かな宇宙から、地球に住む生物、深い地球内部まで、まだ知らない未知の世界。多くの工学機器が宇宙や地球の新たな発見の手助けを担い、日々発展している。三十年前の固定電話が携帯に代わり、今では手の中にパソコンがある。工学技術の最先端に居る人達は、日々ワクワクしながら仕事をしているのだらうなあ。分野の壁を越え想像するちからを最大限に発揮して、新たな創造の世界で私も遊んでみよう。

それは、二十代の若者から届いた一通の便りでした。ススケた黒い表紙を開けると、そこに書いてあった言葉は……

「果てしなき未知への飛翔」

ある日、自宅の本棚を整理して出てきた古ぼけた冊子。奥付を見ると、一九七一年一月十日発行、熊本大学探検部の部誌創刊号でした。

実は私が熊大三年生の時、それまで熊大に無かった探検部を創設したのでした。当時は全国的に学園紛争が広がり、熊大も封鎖されて半年ほど授業が無い状況が続いていました。そんな中で「何か新しいことに挑戦してみたい」という思いが募っていたようです。

あれから半世紀近くの時間が過ぎ、久し振りに当時の部誌創刊号を目にして、そこに書いてあった（かつて

の自分が書いた）「果てしなき未知への飛翔」というメッセージに、改めて思いを巡らしてしまいました。

思えば、私はこれまで結構チャランポランな人生を送ってきたような気がしますが、熊大の工学部を出て上京し沖電気工業に入社しましたが、わずか二年ちょっとで退職。当時華やかだっ

### 若気の至り

い熊本にUターン、一人でデザインの仕事始めることに。その時も「熊本に帰って仕事の当てはあるの？」と周囲には心配されました。それでも手探りで仕事をしながら、数年後に法人化、社員も増え、その数年後には数千万円の借金をして自社ビルを建てるという暴挙に。

そんな若気の至り

だらけの自分を振り返ってみると、心のどこかにいつもあの言葉「果てしなき未知への飛翔」があったような気がするので。知らないからやってみる、未知の世界だからそこへ飛んでみよう、みたいな。

たデザイン業界に憧れて東京の小さな個人デザイン事務所に弟子入りしました。家族や会社の同僚、上司、友人などは「世の中そんなに甘いもんじゃないぞ」と猛反対でした。

そして三十歳になった頃、すでに結婚して子供も二人いましたが、何のツテもな

それは仕事ばかりではなく趣味の世界でも。私にはまった運命的なきっかけは、たまたま車の中でカーラジオから流れてきたあるラジオ番組でし

た。コード奏法という、聞いたこともない手法で演奏しているというピアノバーのマスターの話に衝撃を受けた私は、その番組が終わるとすぐにその放送局に電話しました。「さっきの番組に出ていた人の連絡先を教えてください！」と。そして、教えてもらった連絡先に電話し、そのマスターのバーを訪ねて行ってレッスンが始まりました。

約一年のレッスンの後は、夜の街のあちこちに顔を出しては凶々しくもそのピアノで飛び入り演奏。やがてそんな体験を自分のブログに書き溜め、今度は出版社へのアプローチ。出版社には全くツテも情報もありませんでしたが、お金を出



カット：小川正嗣

せば本になる「自費出版」ではなく、出版社が自社の責任で発行する「商業出版」を想定しての無謀なアプローチでした。

するとまさかの流れに。あれよあれよという間に中央の三つの出版社から計八冊の本が商業出版されました。

すっかり歳を重ねた自分に、かつての二十代の若者から届いた一通の便り。そこに書いてあった言葉は……「果てしなき未知への飛翔」

三十年代、四十年代、五十代の頃の自分は毎日がめまぐるしく過ぎて行き、そんな言葉をいちいち意識している余裕はありませんでした。でも振り返ってみると、自分の気持ちのどこかに、若い頃のこの言葉がずっと潜んでいたのかも知れません。思えばここまで若気の至りの繰り返し。この先、未知への飛翔はともかく、ミチに彷徨う徘徊老人にならないよう気を付けねば。

エッセイ 鮎川久雄

文化一般 株式会社フォーカス代表取締役